

# 新学習指導要領に普通科高校はどう対応したか

## ——「教育の基調の転換」と教育課程の編成方針——

山村 滋（大学入試センター）、荒牧草平（群馬大学）

2003年度から実施された新教育課程は「教育の基調の転換」を目指すものである。本稿では、「教育の基調の転換」に普通科高校がどう対応したかを、学校の社会的位置づけの観点から分析した。その結果、「旧学力」「詰め込み」は進学率の高い高校および私立で重視される傾向があること等が明らかになった。このことは、高校教育改革のゆくえが大学入試制度のあり方や各大学の入試方法に強く依存することを意味している。各大学は入試方法やアドミッション・ポリシーを考える際、このことに留意することが望まれる。

### 1 研究の背景と本稿の課題

2003年4月から高校においても新しい学習指導要領に基づく教育課程が実施され、この春（2004年）で1年が経過した。この教育課程改革は、「教育の基調の転換」をめざすものであり、そのルーツは、1984年に3年間の期限つきで設置された臨時教育審議会の答申にある（柴田 1999）。臨教審は、「21世紀のための教育の実現に向けて、教育の現状を踏まえ、時代の進展に対応しえる教育の改革を推進するための基本的考え方として」、「個性重視の原則」「生涯学習体系への移行」「変化への対応」の3つを掲げていた（臨時教育審議会 1987, 16-20頁）。

このうち最も重視されたのが「個性重視の原則」であった。同答申は、従来の教育が画一的・硬直的であり、各人の個性・能力・適性等を伸ばしていく面に欠けていること、偏差値偏重・知識偏重であること、を厳しく批判し、『個性重視の原則』に照らし、教育の内容、方法、制度、政策など教育の全分野について抜本的に見直していかなければならない（臨時教育審議会 1987, 16頁）と主張したのであった。

こうした考え方は、第15期中央教育審議会にも受け継がれていった。同審議会は第1次答申（1996年7月）において、「これまで

の知識の習得に偏りがちであった教育から、自ら学び、自ら考える力などの「生きる力」を育成する教育へとその基調を転換していく」（第2部第1章(1)[2]）ことが重要であり、「生きる力」を育むためには、「ゆとり」の下で「個性を生かす」教育を行うことが必要だと訴えた。その背景には、「受験のための知識を詰め込む」ことを強いる「過度の受験競争」が、子どもたちから時間的・精神的「ゆとり」を奪っているという認識があった（第1部[2](3)）。この理念は1998年7月の教育課程審議会答申へと受け継がれ、高校段階では昨春（2003年4月）から実施された新しい学習指導要領へと具体化されていくことになる。

以上からわかるように、「教育の基調の転換」とは、「知識偏重・受験学力」から「生きる力」へ、「詰め込み」から「ゆとり」へ、「画一的」から「個性を生かす」教育へという基調の大転換を目指すものであると言える。

ただし、新学習指導要領に関してはその実施前から学力低下を懸念する声が高まっていた。こうした背景の下に2002年1月、遠山文部科学大臣（当時）は『学びのすすめ』という緊急アピールを出している。この中では、「学習指導要領は最低基準」であることが表明

されている。このように教育課程政策には、ゆらぎあるいは修正とも言える状況が起きている。

こうした流れは、大学入試の動向にも連動している。高校教育の多様化・教育課程の基準の弾力化に呼応した形で、1980年代後半頃から、大学入試の多様化・軽量化が進展していった。この大学入試の軽量化は、高校教育課程や高校での履修の受験シフトを可能にした要因の1つと考えられており（荒牧・山村 2002, 山村・荒牧 2003）、また、大学でのリメディアル教育を招いた原因ともみなされている（荒井 1999）。こうした動向を背景としながら、大学入学者の学力低下も近年、問題視されるようになった。そして、国立大学協会は2000年11月に「国立大学志願者に対しては、2004年度より大学入試センター試験で5教科7科目を課すべきだ」と提言した。このように大学入試に関しても、最近、ゆり戻しが起こっている。

このような動向に照らすと、各高校は、矛盾・対立する諸要素を勘案しながら新教育課程を編成せざるを得ない状況にあると言える。「教育の基調の転換」政策にもとづく新学習指導要領に対して、各高校はどのように対応したのかを明らかにすることは、高校と大学との接続のあり方を考えようとする上で、基礎的かつ重要なテーマである。そこで、われわれは、どのような方針を立てて教育課程を編成したのかを高校への全国的な調査を実施して明らかにすることを課題として設定した。その際、高校の教育課程は大学進学率や設置者によって特徴づけられる面がある（荒牧・山村 2002, 山村・荒牧 2003）ことに着目し、これらとの関わりから分析することにした。

## 2 データと分析方法

### 2.1 データ

本稿が使用するデータは、大学入試センター研究開発部試験環境研究部門が2003年1

月に実施した「全日制普通科高校における新しい教育課程の編成に関する調査」の回答である。同調査は、編成方針のみならず、教育課程の立案組織・編成プロセス、およびコース・類型の設置、教科・科目の開設状況、履修設定等についても教務主任に回答をお願いしたものである<sup>1)</sup>。母集団は、『高校総覧2001』（リクルート2001）に収録されている全日制普通科設置校（分校を含む）であり、このうち50パーセントにあたる2047校をランダムサンプリングにより抽出した。ただし、このうち66校は、廃校および設置学科の変更等により、2003年度以降普通科を設置しなくなる。したがって、これらを除く1981校が本研究の調査対象となる。このうち1248校から回答を得たので、回収率は63.0%（ $1248 \div 1981 \times 100$ ）となる。

### 2.2 編成方針の調査法

大量のデータを収集しようとするときには、質問紙による方法が一般的である。この質問紙によるデータ収集方法には、大別すると、回答者にいくつかの選択肢から選んでもらう「クローズド・エンド」方式と、自由に文章や語句を書いてもらう「オープン・エンド」方式がある。そして、社会調査においては、圧倒的に前者の形式が多い（谷岡 2000）。

ところが、教育課程編成方針をこのクローズド・エンド方式で調査しようとするとき、本音が得られないおそれがある。なぜなら、①「学校は法令および学習指導要領にしたがって教育課程を編成するものとする」とされており、②わが国の教育課程行政は、文部科学省が教育課程の基準を定めて各教育委員会におろし学校がそれを実施するというシステムをとっている（天笠 1999）からである。したがって、たとえば「生きる力」をどの程度重視したかを「クローズド・エンド」方式の一種である評定法でたずねた場合、実際に「重視しなかった」としても「重視した」と回答す

るとは十分にありえることである。このような点を克服する方法として、われわれは教育課程の編成方針について以下のように自由回答により編成方針をたずねることにした。ここに記述されたことは、その学校で重視されていると考えられる。

「監督官庁の指針を踏まえた貴校独自の新教育課程編成方針についてお答えください（5つまで）」。

### 2.3 「教育の基調の転換」の把握法

上述のように新学習指導要領は、「教育の基調の転換」政策に基づくものであるが、ここで「教育の基調の転換」を図式化して示しておきたい。繰り返しになるが、わが国の教育

課程政策の目指す「教育の基調の転換」とは①：「知識偏重・受験学力」から「生きる力」へ、②：「詰め込み」から「ゆとり」へ、③：「画一的」から「個性を生かす」教育を目指すものである。したがって図1に示すように「旧い教育の基調」から「新しい教育の基調」へという図式で「転換」を示すことができる。われわれが着目するのは、図に示す「教育の基調」が各高校の教育課程編成方針にどう反映されているか、およびその様相が、大学進学率<sup>2)</sup>や設置者によってどう異なるかである。なおここでは、図に示すように、知識偏重、受験学力といった学力を「旧学力」と、「生きる力」に代表されるような学力を「新学力」と呼ぶことにする。

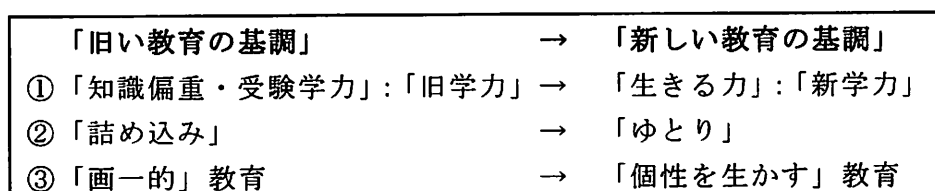


図1 「教育の基調の転換」

### 2.4 具体的な分析手続き

各学校の編成方針には、図1に示した「教育の基調」がそのまま「記述」されているわけではない。そこで、各学校がどの側面に対応して編成方針を立てているかを判別するために、表1に示すような、それぞれの「教育の基調」に対応するキーワードを設定した。このキーワードと類似した表現を編成方針の中で使っている学校は、そのキーワードに対応した「教育の基調」を重視していると判断した。たとえば、「生徒自ら考え、自らの力で選択し主体的に行動できる資質や能力の育成を図る」という編成方針を立てている場合、これは「生きる力」に類似のものと判断できる。ここで「生きる力」は、表1に示したように、「新学力」のキーワードの1つである。したがって、この編成方針を立てている学校は「新学力」を重視しているとみな

した<sup>3)</sup>。

キーワードの措定には、上記の中教審答申、教育課程審議会答申、高等学校学習指導要領、および、文部省が発行した『高等学校学習指導要領解説－総則編－』（1999）等を参考にするとともに、実際の回答を参照した。

アのキーワードには、上記『解説』において「生きる力」を培うことに関連づけられている語句を選定した。イには、「旧学力」が従来からの学力であること、臨教審等で、「知識の習得に偏りがちであった教育」が批判されてきたこと、また、大学受験に必要とされてきた学力であることから、知識重視、大学受験、およびそれに関連する「進学校」を措定した。また、学力低下防止の方向性もイのキーワードとして設定した。ウに関しては、学校週五日制により授業時間を減らして「ゆとり」を生み出すという政策意図、および、「ゆ

とり」のなかで、「基礎基本」の習得をはかるということから、このように定めた。エに関しては、「ゆとり」の手段としての五日制への不同意、あるいは、従来の授業時間数等を五日制のもとでも維持することなどが考えられる。そこで、このようなキーワードを設定した。オに関しては、上記の『解説』を参照して「個性を生かす」教育という趣旨に沿った

ものを設定した。なお、「総合的な学習の時間」は『解説』によれば「個性を生かす」教育の脈絡でも出てくるが、「総合的な学習の時間」は今回の「生きる力」を育成するための目玉であるので、アに分類することにした。カは、「画一的」という点から新学習指導要領の指し示す選択の幅の拡大と反対の方向性のキーワードを措定した<sup>4)</sup>。

表1 「教育の基調」とキーワード

「教育の基調」		キーワード
ア	「新学力」:	生きる力、問題解決・体験学習、総合的な学習の時間、豊かな人間性・社会性の育成、国際社会に生きる日本人としての自覚、異文化理解、ボランティア活動・勤労・就業体験
イ	「旧学力」:	知識重視、大学受験、進学校、学力維持
ウ	「ゆとり」:	ゆとり・授業時間減、基礎基本重視
エ	「詰め込み」:	授業日数を減らさない、授業時間維持
オ	「個性を生かす」:	個性を生かす教育、生徒のニーズに応じる教育、進路希望に応じる教育、選択の拡大 特色ある教育、学校設定教科・科目の設定、 少人数・習熟度別等の指導
カ	「画一的」:	選択をなくす・少なくする、共通性重視

### 3 分析結果

#### 3.1 「教育の基調」と「教育課程の編成方針」の対応関係について

表2は6つの「教育の基調」のそれぞれを編成方針とする学校の割合を示したものである。ここから以下の点が指摘できる。

①政策的にはもっとも強調されている「新学力」を編成方針として掲げている学校は24%であり、「旧学力」を編成方針として

掲げている場合(31%)よりも、低くなっている。

②「ゆとり」を編成方針とする学校が29%ある一方で、「詰め込み」を掲げる学校も、10%存在する。

③「個性を生かす」教育を編成方針とする学校は57%である。一方、「画一的」教育は編成方針にはほとんどなっていない(0.6%)。

#### 3.2 大学進学率別の違いについて

次に、大学進学率とのクロス集計(表3)からは、以下の特徴が挙げられる。

①「新学力」は、進学率によってあまり違いがない。

②「旧学力」「詰め込み」は進学率と正の関係にある。

③「ゆとり」「個性を生かす」は進学率と負の関係にある。

表 2 「教育の基調」と「教育課程の編成方針」の対応関係

	編成方針とする割合(%)
「新学力」	24.2
「旧学力」	31.2
「ゆとり」	29.4
「詰め込み」	9.7
「個性を生かす」	56.9
「画一的」	0.6
学校数	1172

表 3 「教育の基調」と「教育課程の編成方針」の対応関係（大学進学率別）

	進 学 率			
	0-40%未満	40-70%未満	70-90%未満	90-100%
「新学力」	25.3	23.5	23.2	25.8
「旧学力」	18.2	27.1	39.6	46.2
「ゆとり」	39.3	28.2	26.4	19.6
「詰め込み」	2.7	6.1	17.1	16.4
「個性を生かす」	66.7	61.0	55.4	39.6
「画一的」	0.6	0.0	0.7	1.3
学校数	336	277	280	225

### 3.3 設置者とのクロス集計

最後に、設置者とのクロス集計（表 4）からは、以下の点が指摘できる。

①「新学力」については、編成方針とする割合は、公立と私立でほぼ同程度である。

②「ゆとり」「個性を生かす」については、公立の方が、方針として掲げる割合が高い。

③「旧学力」「詰め込み」については、私立の方が編成方針とする割合が高い。

表 4 「教育の基調」と「教育課程の編成方針」の対応関係（設置者別）

	設置者	
	公立	私立
「新学力」	23.9	25.0
「旧学力」	29.7	35.4
「ゆとり」	33.2	18.8
「詰め込み」	8.0	14.3
「個性を生かす」	61.5	44.2
「画一的」	0.4	1.3
学校数	858	308

## 4 まとめと考察

### 4.1 まとめ

本研究の分析は、以下のように要約できる。

①「新学力」はそれほど編成にあたって重視されているとは言えない。なお、これを編成方針としている割合は、進学率や設置形態に

よって異なるのが特徴である。②「旧学力」「詰め込み」は、進学率の高い高校および私立で重視される傾向がある。③一方、「ゆとり」「個性を生かす」教育は、進学率の低い高校および公立で重視される傾向がある。④なお、「画一的」教育を編成方針として掲げる高校はほとんどない。

#### 4.2 大学入試の位置と役割

「旧学力」「詰め込み」を編成方針とする学校は、大学進学率と正の関係を持っていることは、これらの方針が「大学進学」にとって適的であることを示している。このことは、高校教育改革のゆくえが大学入試制度のあり方や各大学の入試方法に強く依存することを意味している。より生産的に言い換えるならば、大学の入学者選抜・入学試験問題に対する考え方・姿勢が、高校以下の学力のあり方を変革する可能性が高いということになる。各大学は入試方法やアドミッション・ポリシーを考える際、このことに留意することが望まれる<sup>5)</sup>。

#### 註

- 1) この調査に関しては、山村他(2004)を参照されたい。
- 2) 本稿で用いる大学進学率は、各高校に直接回答してもらった次のような値から算出した。調査票では、平成14年3月の卒業生の進路を、「大学・短大進学者」「大学浪人」「専修・各種学校進学者」「就職者」「就職浪人」「その他」の別にたずねているので、このうち「大学・短大進学者」「大学浪人」の和を卒業生数で除した百分率を大学進学率と定義した。なお、大学・短大への進学者数については、合格者数ではなく実際に入学した生徒数を回答するようお願いした。また、併設校の場合には、普通科に関する値を使用した。
- 3) この作業の詳細については、山村他

(2004)第2章参照。なお、この作業には佐藤裕氏(富山大学人文学部)作成の「AUTOCODE for Windows(Ver. 1.03)」を利用した。

また、回答の中には「学習指導要領の趣旨を踏まえて、充実した内容を持つ教育課程の編成をする」等の新学習指導要領の趣旨に従うことを編成方針としている高校が20校あった。これらの高校については「新学力」「ゆとり」「個性を生かす」の3つとも編成方針として掲げてあるものとみなした。

- 4) ここからわかるように、キーワードは政策の脈絡とのかかわりから設定したものであり、たとえば、「個性を生かす」教育として本質的に望ましい内容をあらかずキーワードと一致するとは限らないものであることに注意されたい。
- 5) もちろん、大学には高校生にとってより好ましい「学力」のあり方を追究しながら、入試業務に就いている教員・職員が少なからずいるであろう。より多くの教員・職員が同様の努力をすることを求められているといえよう。

#### 文献

- 荒井克弘, 1999, 「大学入学者選抜」『高等教育研究所紀要』17, 97-110.
- 荒井克弘, 2000, 『学生は高校で何を学んでくるか』, 大学入試センター研究開発部.
- 荒牧草平・山村滋, 2002, 「多様化政策下における普通科高校教育課程の実証的研究」『大学入試センター研究紀要』31, 11-27.
- 中央教育審議会, 1996, 『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について—子供に「生きる力」と「ゆとりを」—』(第15期中央教育審議会第一次答申), 文部省.
- 教育課程審議会, 1998, 『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校, 盲学校, 聾学校及び

養護学校の教育課程の基準の改善について（答申）』，文部省．

文部省，1999，『高等学校学習指導要領解説－総則編－』，東山書房．

谷岡一郎，2000，『「社会調査のウソ」－リサーチ・リテラシーのすすめ－』，文春新書．

リクルート，2001，『高校総覧 2001』，株式会社リクルート進学情報ディビジョン企画室．

臨時教育審議会，1987，「教育改革に関する第四次答申（最終答申）」『文部時報』昭和 62 年 8 月臨時増刊号，ぎょうせい，8-49．

柴田義松，1999，『学校知・学習観の転換がなぜ必要か』，明治図書．

柴田義松，2000，『教育課程－カリキュラム入門－』，有斐閣．

山村滋・荒牧草平，2003，「大学入学者の高校での科目履修と受験行動－普通科に関する実証的研究－」『カリキュラム研究』12，1-14．

山村滋・荒牧草平・池田輝政，2004，『高等学校における新しい教育課程の編成』，大学入試センター研究開発部．